様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３３９２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０３１２９

研究課題名（和文）若手保育者の保育観の構築を支える取組みとしての科学コミュニケーションの場の開発

研究課題名（英文）Developing a setting for scientific communication to support novice preschool teachers' philosophy of early childhood education

研究代表者
井上　知香（Inoue, Chika）

愛知淑徳大学・福祉貢献学部・講師

研究者番号：８０７１０５４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、若手保育者の保育観の構築を支える取組みとしての場を開発した。幼児期の「これなんだろう？もし〇〇だったら…」といった科学的な発見や身近な物事への素朴な疑問と、想像を大切にした親子ワークショップの場を生み出し、そこでの子どもの想像から始まる物語をサポートするスタッフとして参加した若手保育者の、子どもの表現理解や自らのかかわりについて省察する場としての機能が確認された。物語作成には子どもの表現活動をサポートするツールとしてデジタルデバイスを使用した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日常のコミュニティとは異なるコミュニティにおいて通常とは異なる役割を担いながら、新たな保育実践を経験する中で、新しい保育観を構築していくことは、保育の専門性を高めることに貢献したと考える。またデジタルデバイスの活用を通した、子どもと大人で生み出す新たな知の創発を可能にする新たな関係性の開発という点で独自性と創造性を有する。

研究成果の概要（英文）：We set up the “Third place to learn” in which not only practitioners but also parents and researchers gather informally so that novice ECEC teachers’ reflect their philosophy and learn from each other. The workshop was designed to create children’s scientific exploration, simple questions about things around their lives. The novice ECEC teachers' understanding of children's expressions and their own response was emerged. Digital devices were used as tools to support children's expressive activities in the creation of the imaginary world.

研究分野：保育・幼児教育

キーワード：応答性　　若手保育者　保育観　科学コミュニケーション　対話　デジタル　親子

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

幼児教育においては「遊び」を中心とした指導を展開するという考え方が国の方針として示されている。これは個々の発達過程に差がみられる子どもたちに自分のリズムで選択する時間と空間を与える中で、「自ら」という体験を保証しようという考えのもとに成り立っている。したがって保育内容には到達目標というものは設定されない。しかしながら現状では、日本の保育には様々な形態が存在し、毎年同じように子どもに教える内容があらかじめ計画され、それを実践するのが保育内容だとする理解も少なくない。保育実践においては、計画と援助というものが重要な概念として存在する。ショーン（2007）は専門家というものは深い省察を経て実践を行っていくのだとし、専門性が高い保育者の行為は計画だけで語れるものを超えていることを示唆している。認知科学者であり文化人類学者であるSuchman（1987)は、「計画」を、体系立って人間の行為を予想するものではなく、「本来的にはアドホックな活動に対して、たかだか弱いリソース（資源）である」と捉える。そして人間の行動とは、そのリソースに基づいて変容していくものであると述べる。

保育学生や若手保育者は、立てた計画が実践の中でうまく実行されたか否かに多くの注意をはらう傾向があることが、研究代表者が保育者養成校で勤める中で見えてきた。現場では計画通り上手に実践できることが評価されることも現実である。そのため、若手保育者が就職後に経験の不足から、できない自分に直面することになり、保育者としてのアイデンティティが形成される時間も許されないまま自己自身が揺るがされる危機に直面する結果も生じている。

保育者の存在を支える保育の在り方として、あらかじめ決められた計画を実行するのではなく、子どもと大人が応答的に創り上げる日々の保育実践が求められる。子ども「自ら」のみならず、大人「自ら」の存在も認められる場である。

２．研究の目的

本研究は以上のような課題を背景にして、保育者自らが子どもと応答する中で、自ら子ども理解を深めながら保育観を構築していくという保育者の成長過程を大事にする育成の在り方を追究した。そのことが、個々の保育者の個性が生かされ「保育の質の向上が成される」ことへと繋がっていくと考えるからである。そのためには、子どもの遊びを通した探求の姿を中核に据え、保育者のみならず保護者や研究者がインフォーマルに集い、学び合う「第三の学びの場」の創造も重要となる。本研究では、若手保育者の保育観の構築を支える取組みとしての科学コミュニケーションの場の開発を行い、このフィールドを基に、子どもと大人（保育者・保護者）が応答的に作り上げる場に、保育者がインフォーマルに参加し体験を重ねることで、その保育観がどのように変容するのかを明らかにしていく。その変容の要素こそ、新しい保育観の理念と考える。

３．研究の方法

(1) 若手保育者の保育観の構築を支える取組みとしての科学コミュニケーションの場の開発

(2) ワークショップに参加した保育者の保育観の変容過程の検証：事例検討会をワークショップ実施と同回数実施し、研究者も加わり、実践を保育者自身がどのように捉えたか、また自分自身の気づきや認識の変化について意見交換を行うとともにグループインタビューを実施した。ここでは自己を省察する機会であることに焦点を置く。意見交換の場で語られたこと、インタビューデータは逐語録に起こし、個人の変容過程を明らかにするのに適している質的分析方法を用いて検討した。

(3) ワークショップでの親子・保育者のやりとりの検証：物語作成の様子をビデオカメラで録画し、各親子・保育者の会話のやり取りを録音した。また保護者にアンケートを実施した。録画・録音データを記録に起こし、分析データとした。分析データとアンケートは質的分析方法を用いて検討した。

倫理的配慮：研究遂行に当たっては、対象者のプライバシー、権利に十分配慮した。データ取得、取り扱いについて十分に配慮する旨を事前に保護者、子ども、保育者に説明し、同意を得ている。また愛知淑徳大学福祉貢献学部の研究倫理審査の承諾を得て実施した。

４．研究成果

(1) ワークショップは、2019 年度～2022 年度にかけて計 9 回実施した。

・文京区教育センター（①2019/9/28②2019/11/2 ④2022/3/29 ⑤2022/8/19 ⑥2022/10/1 ⑨2023/3/11）

・はまぎん こども宇宙科学館（横浜市）（③2021/8/29 オンラインにて実施）

・八王子市中央図書館（⑦2023/2/19）

・トヨタモビリティ中京株式会社 MOBILITY GATE 吹上/ 社会福祉法人名古屋市千穂区社会福祉協議会（⑧2023/3/4）

「これなんだろう？もし〇〇だったら…」といった科学的な発見は身近な物事への素朴な疑問と、想像から始まる。ワークショップでは、身近な自然事象を題材に、子どもが自身の体験を通した想像から始まる物語を、大人がサポートしながら iPad（絵本製作アプリ「ピッケのつくるえほん」使用）で創作した。参加した親子に対して保育者及び保育者を目指す学生が寄り添う形をとった。創作したものを、参加者間でスクリーンに写す形で共有をした後、個別にプリントアウトし絵本にして、持って帰れる形にした。

＜対象児の年齢＞開始当初から回を重ねながら見直し、4 歳児～小学校 1 年生とした。

＜環境構成＞表現ツールとしてのデジタルデバイスの活用については、見やすさや視覚的効果の強さによって幼児同士の協働的創造性を促すという示唆がある。ワークショップを重ねながら、机の上で実施する事に比べ、床座で実施する事により、それぞれの親子・保育者グループ間での影響のしやすさが確認されたため、床座の環境構成で実施した。また各回の参加親子は基本 7 組とした。1 回のワークショップは 90 分を基本として実施した。

＜振返り・学び合い＞ワークショップ実施後は保育者、学生と研究者間でその日の子どもの表現や自分のかかわりについて語り合う振返りの場を設けた。保育者らと研究者で、オンラインでの勉強会や打ち合わせの機会も定期的に設けた。

(2) インフォーマルな学びの場において、保育者たちは自身のこれまでの子どもの関わりや構築してきた保育観を基に、ワークショップにおける親の子に対する関わりを見ながら、共感したり疑問を呈したりしていた。そこには自分を重ね合わせる保育者もおり、こうありたい自分とそうできない自分のせめぎ合いが起こっていた。中には、自身の職場での実践を変える必要があると言及した者までいた。こうした意見は、参加者間及び研究者間において共感的に受け止められた。そこでは「正解を求められない場」として、

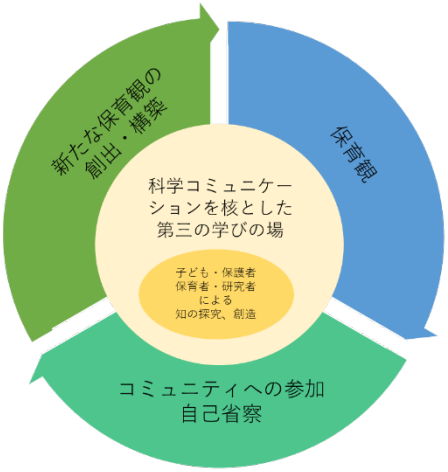

図1 保育者の力量形成を支える新たなコミュニケーションモデル

そもそも正解のない保育者と子どもの関わりについて検討する場が醸成されていた。
(3) 保育者の関係構築においては、まず親子の様子を見ながら、次第に親子へと応答的な働きかけを通した介入行動が見られた。次第に子ども・保護者・保育者の三者のかかわりが生み出されていったことも確認された。

これらの保育者の「うごき」からは（木下,2020)、保育者自身に揺らぎをもたらし、ある矛盾に向き合う場であり（エンゲストローム,2020)、変化をもたらす場であったことが認められた。直接の保育の場にはいないけれども、ワークショップへの参加を通して保育者として子どもとの関わりの理念を醸成していたといえる。McKay and Sappa (2019) は、教師のアイデンティティの成長は変化することにあり、その過程は、認知的な緊張や曖昧さ、多様な見方を経験することで、今までの考え方に挑戦し、新しく「感じること、考えること、行動すること」であると述べているが、この考えに依拠すれば、インフォーマルなワークショップの場は、保育者にアイデンティティの変化をもたらす場であったといえる。
日本の保育者の早期離職者の多さは、OECD (2017) からも指摘されているところである。国は現在、こうした状況を鑑み、その解決策を研修を通した若手保育者のスキル向上に求めている。本研究結果では、若手保育者と親子そして研究者が会するインフォーマルな場が、若手保育者達に揺らぎをもたらしながら「関わりの理念を醸成する」場として機能し、彼らを支える一つの学びを生み出していることが明らかとなった。保育者の学びのモデルの一つとして示すことができると考えている。

＜引用文献＞
ドナルド・A・ショーン（柳沢昌一・三輪健二監訳）(2007)『省察的実践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房.
木下康仁 (2020)『定本 M-GTA :実践の理論化をめざす質的研究方法論』医学書院.
McKay, L., & V. Sappa. (2019). Harnessing Creativity through Arts-Based Research to Support Teachers Identity Development. Journal of Adult and Continuing Education (online first): 118.
OECD (2017). Age distribution of teachers in pre-primary education. Retrieved from http://www.oecd.org/publications/starting-strong-v-9789264276253-en.htm（情報取得日 2021/8/13)
Suchman, Lucy A. (1987). *Plans and Situated Actions: The problems of human machine communication*, Cambridge University Press. 佐伯胖監訳 (1999) プランと状況的行為－人間機械コミュニケーションの可能性－. 産業図書.
ユーリア・エンゲストローム（山住勝弘訳）(2020)『拡張による学習　完訳増補版―発達研究への活動理論からのアプローチ』新曜社.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Inoue Chika, Osaki Akihiro, Goto Ikuko, Suematsu Kana	４．巻 2020
２．論文標題 Development of a place for science communication as an initiative to support the construction of a novice ECEC practitioner's view of children	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Impact	６．最初と最後の頁 20～21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21820/23987073.2020.8.20	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 井上知香・後藤郁子・末松加奈
２．発表標題 インフォーマルな場における若手保育者の学び
３．学会等名 日本教育学会第80回大会　（Web開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 大﨑章弘・井上知香・末松加奈・後藤郁子
２．発表標題 ICT を活用して子どもの科学的概念を育む物語創作ワークショップの開発と実践
３．学会等名 第17回 日本子ども学会学術集会（Web開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 末松加奈・井上知香・後藤郁子・大﨑章弘
２．発表標題 幼児の物語創作における保育者の介入行動に関する一考察：ある男児のデジタル絵本創作活動に焦点をあてて
３．学会等名 日本発達心理学会第32回大会（Web開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Chika Inoue, Akihiro Osaki, Ikuko Goto, Kana Suematsu
２．発表標題 Developing a Setting for Scientific Communication to Support Novice Preschool Teachers’ Philosophy of Early Childhood Education
３．学会等名 Hawaii International Conference on Education, 18th Annual Conferenc（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

井上知香・大崎章弘・後藤郁子・末松加奈「親子・保育者・研究者とともに創るデジタル科学絵本ワークショップ」2023年2月1日　研究成果報告書としてのリーフレット作成

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大崎　章弘 (Osaki Akihiro) (70386639)	お茶の水女子大学・サイエンス＆エデュケーション研究所・特任講師 (12611)	
研究分担者	後藤　郁子 (Goto Ikuko) (60724482)	お茶の水女子大学・基幹研究院・基幹研究院研究員 (12611)	
研究分担者	末松　加奈 (Suematsu Kana) (30825625)	東京家政学院大学・現代生活学部・助教 (32648)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関